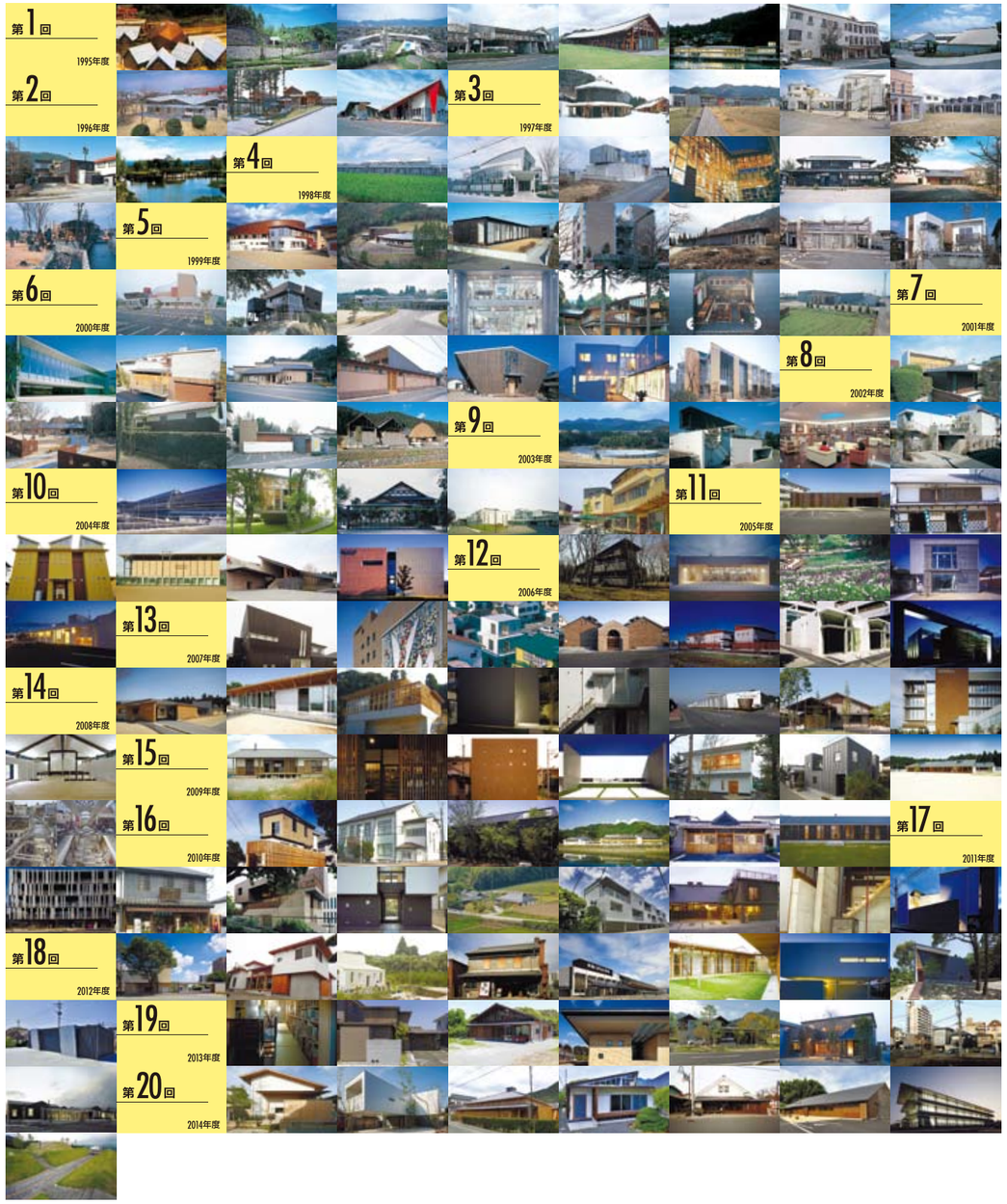


熊本県土木部建築住宅局建築課
アートポリス・UD班
〒862-8570　熊本市中央区水前寺 6-18-1　Tel.096-333-2537　Fax.096-384-9820
http://www.pref.kumamoto.jp/site/artpolis/　http://www.facebook.com/kumamotoartpolis

発 行 者：熊本県
所　　属：建築課
発行年度：平成26年度

第 20 回（2014 年度）

くまもとアートポリス推進賞

K U M A M O T O　A R T P O L I S

1

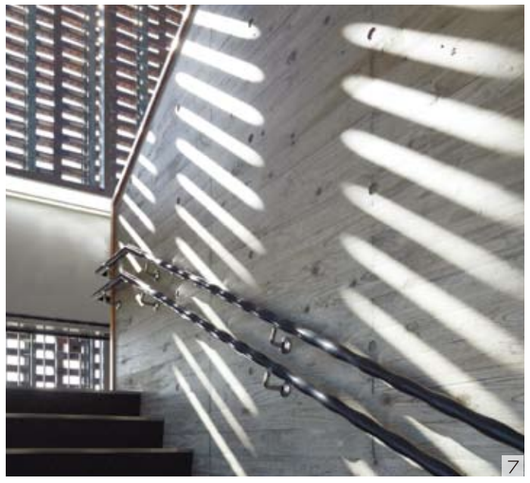
2

3

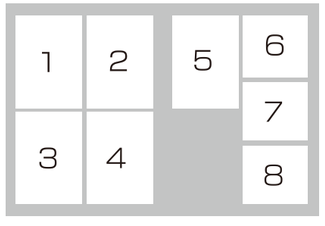
4

5

6


7

8



くまもとアートポリス推進賞

1. 沼山津の家 …… 04
2. House F, nagamine …… 05
3. 湯浦温泉センター …… 06
4. MA-HOUSE …… 07
5. 供養普請の家(佐藤忠商店) …… 08

くまもとアートポリス推進賞選賞

6. 古代の風　黒の蔵
-多良木町埋蔵文化財等センター- …… 09
7. 熊本市西区役所 …… 10
8. 旅館　心乃間間 …… 11

第20回「くまもとアートポリス推進賞」の選考を終えて

選考委員長　北野　隆

「くまもとアートポリス推進賞」は、「くまもとアートポリス」事業の一環として、質の高い優れた建造物を顕彰することにより、県民の環境デザインに対する意識の高揚と都市環境並びに建築文化等の向上、併せて豊かな地域づくりを図ることを目的に、１９９５年より行なわれ、本年度・第２０回目を迎えました。

今年度の「くまもとアートポリス推進賞」には、総数４６点の応募がありました。応募作品の用途は専用住宅・事務所・病院・公衆浴場・学校・消防署など、構造は鉄筋コンクリート造・鉄骨造・木造など、規模も大小さまざまでした。

第１次選考の書類審査は、全作品の設計者・施工者・事業主などを隠した上で、選考委員（７名）が各自の持点１０点を Ａ（３点）・Ｂ（２点）・Ｃ（１ 点）の３段階に分けて評価しました。各選考委員の評価を集計しますと、作品は分散した結果になり、全作品について討議し、各選考委員の意見も加味しながら、第２次選考の現地審査作品・８作品が選出されました。　これらの提出書類を見て、設計図や写真の配置、大きさなどをもう少し工夫すれば、自らの主張をより上手く表現できるのではないかと感じました。

現地審査では、設計者へ建築のコンセプトや構造など、事業主には建築の使い方などについて質疑応答がなされました。現地審査では、第１次の書類審査（設計図）では把握できない周辺環境との関係、建築空間の取扱い、素材の感触などが体験できました。

「くまもとアートポリス推進賞」の大きな特徴は、設計者・施工者・事業主の三者を表彰するところにあります。質の高い優れた建造物を造るには、三者が一体となって協力することが必要です。

最終的には「推進賞」として「沼山津の家」・「House F, nagamine」・「湯浦温泉センター」・「MA-HOUSE」・「供養普請の家（佐藤忠商店）」の５作品、「推進賞選賞」として「古代の風　黒の蔵（多良木町埋蔵文化財等センター）」・「熊本市西区役所」・「旅館　心乃間間」の３作品が選ばれました。

これら８作品については、選考委員の先生方が詳細な講評を述べられていますから、ご覧下さい。

また、これら８作品について、私なりにそのデザイン手法を分類すると次のようになるように思われます。

○設計者が、歴史的建築にこだわりながら、地域づくりに貢献している作品。
　「供養普請の家（佐藤忠商店）」・「古代の風　黒の蔵－多良木町埋蔵文化財等センター－」

○建築素材を生かしながら、周囲の環境と融合させた作品
　「湯浦温泉センター」・「沼山津の家」・「旅館　心乃間間」

○設計者が、事業主の要望を加味しながら、自分のデザインを追求した作品
　「House F, nagamine」・「MA-HOUSE」・「熊本市西区役所」

今年度の「くまもとアートポリス推進賞」の応募作品４６点は、質の高い作品が多く選考するのに苦労しましたが、これらの作品から「推進賞」５点、「推進賞選賞」３点の８作品が選ばれました。今回の審査で感じたことは、この「くまもとアートポリス推進賞」が熊本県内の建築関係者に浸透し、この選考を皆が楽しみにしていることです。それは現地審査での事業主・設計者・施工者との質疑応答から伺うことができました。「くまもとアートポリス推進賞」も本年度で２０回を数え、各作品が地域に根ざしたものが多くなり、熊本の建築文化の向上に大きく貢献していることが感じられました。

くまもとアートポリス推進賞
沼山津の家

この作品はまず一次審査のエントリーシートに特徴があった。最初のページが、沼山津の歴史文化遺産のマップになっていて、そのなかに新築でありながら、この住宅が位置づけられていた。現地審査では時間的制約もあり、それら歴史文化遺産を一つ一つ巡ることはできなかったが、この作品の住宅としての存在感には、そう主張するだけの説得力があった。

この作品に説得力があるのは、地域の古い建築のかたちを表面的に引用して、無理に関係づけるようなやり方を避けて、この土地や、日本の伝統的な住宅が培って来た事物の関係性のところにまで降りて行って、現代の家族の暮らしにつなげているからである。現在敷地には、両親が住む和風の母屋を中心に、南側に土壁の古い馬屋があり、北側の道路沿いに、この住宅と築の浅い姉世帯の住宅がある。母屋の脇にはアルミ製のカーポートと、わき水を利用した水場があり、若い二世帯の子供達の遊び場になっている。これなら老夫婦は自然に子供達の面倒を見る事が出来るだろう。各々は核家族に対応した住宅形式であっても、同一敷地内に複数建てる事ができれば、大家族のまとまりも維持できる。これほど豊かな関係性に新築住宅が組み込まれること自体、幸せなことである。こういう暮らし方は東京では望むべくもない。熊本らしさを強く感じた次第である。母屋の対角という配置からすれば、姉の住宅は作業小屋の建て替え、母屋と同じ列の道路に沿うという配置からすれば、この住宅は道路側の守りを固めていた蔵の建て替えであろう。軒高と屋根の勾配の調整による二階建てよりも少し小さいスケール感や、外壁の白いスタッコ吹き付けは、その蔵としての位置付けをうまく引き継ぐものである。二本の棟柱を中心にしたロフトのある吹き抜けの構成も、蔵の「がらんどう」を引き継いでいる。こうした骨格の確かさに加え、古い基礎石を再利用した基壇、玄関前と庭側の下屋や格子、杉の質感を活かした軒裏、奥に深い玄関、趣味の自転車の部屋、小上がり畳とフローリングの段差を吸収するカウンター・キャビネット、各種建具が引き込める絞り込んだ開口、といった細部や材料の選択が、周囲の歴史的環境、道路との隣接、同一敷地内での多世帯の同居、熊本の気候など、多様な事物との関係で暮らしを位置づけている。様々な配慮を見事に統合していくと、現代建築であってもバナキュラーな建築が持つ知性に近づくことができることを示す、卓越した事例となっている。21 世紀の建築が目指すべきは、そういうあり方なのではないかと思っている。

（塚本 由晴）

事業主	田上 祐一
設計者	spacelab. 一級建築士事務所
施工者	有限会社円ホーム
所在地	熊本市東区沼山津
竣工年月	平成26年2月
用　途	専用住宅
構　造	木造
階　数	2 階
敷地面積	250.83m2
建築面積	91.08m2
延べ面積	138.27m2

くまもとアートポリス推進賞

House F, nagamine

周囲は閑静な住宅街。曲がりくねった狭い道路を進んでいくと建物が現れる。２階建ての住宅兼事務所だが、大型の建物ではないので、エッジの利いたスタイルも威圧感はない。

１階部分はＳＲＣの柱４本で接地しており、住宅の玄関と事務所。その柱からＳ造でハネ出した２階にリビングなどを配置したという。道路側に張り出した２階部分は１０メートル近くあるが、張り出し部分と地面との間に柱がないのに驚かされる。反対側の張り出し部分は５メートル程度と、非対称なデザインがリズムを生む。

２階道路側の部屋は細長いリビング。内部は白を基調にキッチンなどが配置されている。大きな窓越しに、自宅の木々に加え、道路の反対側にある木も〝借景〟として室内から楽しめる。

水平方向に構造物を張り出した建物としては、熊本市にある熊本北警察署坪井交番や北九州市立美術館本館が思い浮かぶ。こういった公共建築にはデザイン上の冒険がなされることが多いと思うが、個人の住宅で行うのは勇気のいることだろう。構造家である施主の挑戦を感じる。

２階が浮き上がったかのようなデザインは、１階の接地面積を減らし視線を抜くことで、住宅密集地でのゆとりある空間の創成や隣地への風通しにも配慮した結果という。金属質の立方体が地上に降り立ったかのような姿は、１９６０年代に、未来都市としてイラストなどで紹介された建築を思い起こさせる。そういう意味では、ある種の懐かしさを覚えた。

（田野 弘一郎）

事業主　福島 剛史
設計者　有限会社森繁・建築研究所
施工者　株式会社イケダプランニング
　　有限会社大栄鋼業
所在地　熊本市東区長嶺西
竣工年月　平成25年11月
用　途　事務所併用住宅
構　造　鉄骨鉄筋コンクリート造
階　数　2階
敷地面積　299.54m²
建築面積　125.42m²
延べ面積　199.25m²

くまもとアートポリス推進賞

湯浦温泉センター

開湯 1300 年の歴史をもつ芦北町湯浦地区の町営温泉施設。単純明快な田の字型正方形平面として方形屋根をかけ、周囲に下屋をまわして庇の上を欄間窓とする。杉板といぶし瓦の外観は周囲に違和感なく溶け込み、一見すると昔からある家のような佇まいである。回廊状の下屋は、玄関アプローチ・道路側のファサード・バッファゾーン・メンテナンスの場と、場所によって主要な用途を変えながら基本ひとつのデザインで裏表の区別なくまとめられ、方形の建物にふさわしい要素となっている。杉板は浴場や脱衣所にもふんだんに使われており、木の香りとともに身体感覚にやさしい印象を与える。

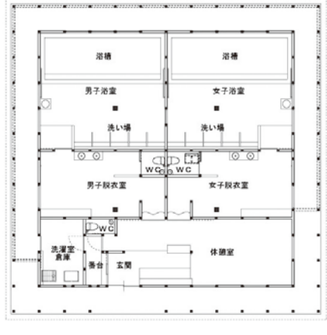
特徴的なのは浴場に露出する架構で、力強く美しい。太い４本柱を建てて正方形断面の水平材で櫓状に組んで固め、そこに梁をかけて方形屋根の和小屋が作られているのだが、４本柱は屋根架構に合理的な位置にあり、それが部屋の間仕切とは一致しないので独立柱として部屋のなかにあらわれている。この柱の土台は水がかり対策のためコンクリートで高く持ち上げられているが、型枠に張ったござの素材感が固さや冷たさを和らげている。

浴場の窓も換気とプライバシーが両立するように工夫されており、下屋に突き出た形状がユニークである。

小さいけれど町の人たちが自慢できる場所となって湯浦の歴史を紡いでもらいたい。

（高橋 晶子）

事業主　芦北町
設計者　有限会社中川建築設計事務所
施工者　株式会社リュウショウ
　　株式会社新星電気
　　有限会社前田プロパン商会
所在地　葦北郡芦北町湯浦
竣工年月　平成26年3月
用　途　公衆浴場
構　造　木造
階　数　1階
敷地面積　812.73m²
建築面積　288.32m²
延べ面積　199.65m²



くまもとアートポリス推進賞

MA-HOUSE

事業主	松永 正大
設計者	長野聖二・人間建築探検處
施工者	前田建設
所在地	八代市宮地町
竣工年月	平成 25 年 6 月
用途	専用住宅
構造	木造
階数	2 階
敷地面積	320.09m2
建築面積	103.97m2
延べ面積	123.54m2

玄関を入るとやや大ぶりのL字型の式台があり、長辺がリビングへの、短辺が和室へのアプローチとなっていて、機能美がある。

玄関、リビング、和室を区切る障子だけでなく、玄関やアトリエ (土間) の扉、和室の明かり取りなどにも障子柄が用いられ、桟のラインと和紙の白が、畳や木のフローリングと調和して互いを引き立てて美しい。

２階への吹き抜け、２階南面が全面の窓、階段の手摺となる縦格子が吹き抜け空間にも巡り、１階の北側奥まで明るさを取り込む。

キッチンのある北側の床のレベルが下げられて、２階と１階のリビングが近づき、かつ、キッチンの目線と掘り炬燵のダイニング・テーブルからの視線も近くで交わり、キッチンの窓越しに、春には桜が掘り炬燵での団欒に花を添える。同じ敷地内、両親の住む母屋のすぐ隣に夫婦と幼い子供達のためのすまいが新築された。

施主の希望は、和室と自転車のアトリエ、掘り炬燵、和風、プライバシーを確保しつつ北側の用水路沿いの桜を眺めることだったという。

建物は、長方形の平屋と片流れの屋根を持つロフト状の２階建ての２つのキューブが合体したユニークなもので、木造ながら外観にはシャープな印象がある。

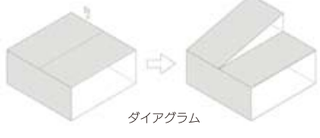
しかしながら、集成材の梁が東西に渡されてワンルームに近い内部空間が支えられ、３層のエレベーションが繋がる、ゆったりした一体感がある。

納戸が１階と２階に設けられているが、１階のそれには、脱衣室からと寝室からの２方向から入れて、ユーティリティー（ランドリー）スペースが設けられるなど、行き届いた配慮がある。

南側には縁側にも似たテラスと１階屋上にもテラスがあって、広々とした庭の眺めが楽しめる。正に施主の想いを、設計者が建築として叶えた。

（西嶋 公一）

撮影 / 笹井マサフミ



ダイアグラム

くまもとアートポリス推進賞

供養普請の家（佐藤忠商店）

事業主	佐藤忠商店
設計者	株式会社福山空間建設研究所
施工者	株式会社福山空間建設研究所
所在地	山鹿市鹿本町
竣工年月	平成 25 年 8 月
用途	店舗併用住宅
構造	木造
階数	2 階
敷地面積	361.85m2
建築面積	181.22m2
延べ面積	246.71m2

築150 年を越える古い町家蔵の改修である。歴史的建造物として保存改修しようとしているのではない。現代の用と趣味に合わせて、もっと自由に改修している。たとえば、LDK の床に使われているフローリング材は東南アジア産。設計者によれば、「この古い商家に合う木を探して見つけた材料とのことだったけれど、普通なかなか、こういう選択はできない。LDK の正面には、薪ストーブがまるで暖炉のように鎮座している。これだって、考えようによっては、かなりミスマッチ。2 階は、もともとは小屋裏の空間。そこに床を張り２階をつくり居室とする。自動的に生まれてくるのは、小屋梁が足下に縦横に飛び交うまるでジャングルジムのような空間だ。そこを子供が自分の部屋にしたいと言って、自分の部屋にしたと言う。たしかに、この空間には秘密基地のような楽しさが満ちている。

拝見していて改めて思ったのは、建築というものにそもそも「完成」はない、ということだ。クッションの位置、壁のカレンダーの位置など、日々、こちらの方がいいかな、と場所を変えてみる。時に、家具を動かす。子供が成長して、全面的に部屋の模様替えをする。傷んだ材を新しい材に交換するのに合わせ、一念発起して、かねて思っていた改装を行う。本来、そうした終わることのない更新の状態そのものが、家というものであり建築というものなのではなかったか。

もちろんその更新には、住まい手の、またその住まい手が信頼して頼んだ大工や建築家のクセが加えられていく。無意識の選択の指向をクセと言う。そして、そのクセの成果の蓄積が家や建物に個性を与えていく。これは近代が見失っていた建築に対する視点であるのだけれど、山鹿という熊本のひとつの古い町で、こうした古来から続く建築のあり方が、今、思いがけない姿で、おそらく隔世遺伝的に再生しはじめている。素晴らしいことだと思った。

（青木 淳）

撮影 / 永石　英彦

くまもとアートポリス推進賞選賞

古代の風　黒の蔵
-多良木町埋蔵文化財等センター-

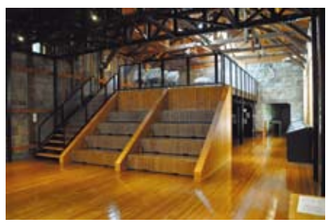
人吉・球磨地方には、明治・大正・昭和のはじめにかけて他地方の土蔵・レンガ造の倉に代って石倉が数多く建てられた。これらの石倉はこの地方の大きな特徴であり、今では近代における歴史的建造物になった。「多良木町埋蔵文化財等センター」は、昭和１７年に石倉として建てられた「黒肥地地域農業協同組合倉庫」を改修したものである。当時の施設は梁間：約９メートル × 桁行：約３６メートルの石倉が中心で、西側に木造の下屋を設けたものであった。この石倉の特徴は構造にある。梁間：約９メートルの長スパンはトラス構造で、石壁の内側に立てられた柱で持っている。石壁は耐火をはじめ温度や湿度など米の保存が大きな役目であった。

今回の改修については、国登録有形文化財への登録を視野に入れて設計したと言う。そのために石壁をはじめ、屋根の木造トラス構造・石壁の内側に立てられた柱など当時の材が使用されている。用途は当時の「米」に代わって、「埋蔵文化財」となるが、耐火をはじめ温度や湿度などの管理が必要である。この施設は地域の文化財をうまく利用した施設である。

（北野 隆）

改修前

事業主　多良木町
設計者　建築士事務所なかおか
施工者　光進建設株式会社人吉支店
人吉電気工事株式会社
有限会社愛瀬電機水道
有限会社久保田建設
所在地　球磨郡多良木町黒肥地蓑田
竣工年月　平成26年7月
用　途　教育・文化施設
構　造　木造石壁
階　数　地上１階（一部、中２階）
敷地面積　1,726.00m2
建築面積　506.00m2
延べ面積　681.00m2



くまもとアートポリス推進賞選賞

熊本市西区役所

清々しさを感じる建築である。田圃と山並みが広がるなかに小規模の建物が点在する環境のなか、西区役所は遠くからも眺められる存在となっている。単純な整形のボリューム、窓口業務の大空間と小部屋群（コア）とに二分された明快で無駄がないプランニングは、普段使いの庁舎建築や地域施設によく見られるタイポロジー（類型）である。

この建築の個性は、平面より外観や断面によく出ている。日射遮蔽のため東側正面に突出したコンクリート打放しの庇は最大６ m、それも上の階に行くほど張り出しているので思わず見上げてしまう。ガラス開口ごしに内部の天井面がそのまますっと伸びているのが見えるが、室内の床と庇は段差があるので、外からの俯瞰が重視されていることがわかる。この庇はそのまま北側に回り込みバルコニーとなって水平線を強調、穏やかで緑多い周囲に大きく窓が開かれる。南東角では微妙な揺らぎをもつテラコッタブロックのスクリーンが階段室をとりまいて木漏れ日のような光が降り注ぎ、建物を垂直に貫くエコボイドが中間期に微風を誘発する。実用性に加えて五感に訴える建築を志向し、丁寧にデザインと性能の両立を測っていると感じた。

ひとつ気になったのは、既存施設に向いた南側の外壁が閉鎖的に見えたことだ。壁面緑化される予定だが、コンクリートの輻射熱が強く植物の成長がままならないのが惜しい。

（高橋 晶子）

事業主　熊本市
設計者　株式会社三菱地所設計九州支店
施工者　岩永・増永・新規・杉山
建設工事共同企業体
所在地　熊本市西区小島
竣工年月　平成24年2月
用　途　庁舎
構　造　鉄筋コンクリート造
階　数　３階
敷地面積　9,248.66m2
建築面積　4,677.06m2
延べ面積　7,501.86m2

くまもとアートポリス推進賞選賞

旅館　心乃間間（このまま）

「心乃間間」は雄大な阿蘇をバックにランドスケープも含む建築構想の旅館である。山林の道をくぐり抜けていくと、敷地入口のサインがさりげなく出迎える。緩やかな丘の上に木造建築が見え、風にゆれる白い暖簾に誘われるように棟に入る。窓には阿蘇の山々が一面に広がりそれだけで豊かな気持ちになれる。７千坪の敷地に客室は１０室。半離れ形式で幾つかのスタイルの空間となっており、全ての部屋から阿蘇の絶景と温泉を楽しめる。本館１階フロアーが個室の食事処。ここもまた他のお客様同士の視線が合わさらないようになっている。そのフロアー中央から外に長いアプローチが伸びており、その先には露天風呂。小さいがここでもゆったりと自然に浸れる。入り口に立てかけられた下駄の鼻緒の色で男湯と女湯を判断できる。このアプローチの両サイドにはシンメトリーの芝山があり、そこにこんもりとした小山がある。最初に階の上から見た時から不思議な形だと思ったら、「芋蔵」を模した客室であった。このような構想からこの建築にあたり土地からひとつも土を外に出してないそうで良い発案だと思った。

この旅館は熊本駅前で永く営まれていたが駅前開発に伴いこの地に移転新築。その内装には欄間、建具、オリエンタルな木のレリーフなど当初の木造建築のパーツが随所に巧みに使われており、それも時間軸をゆったりと感じる要因だと思った。

主張しすぎないさりげないサインの使い方や客室の視線への配慮は心地よく感じたが、動線の中にステップアップが随所にあり少し気になった。

（大野 郁子）

事業主　株式会社藤江旅館
設計者　大森創太郎建築事務所
施工者　株式会社橋本建設
　　有限会社山口農園
所在地　阿蘇郡南阿蘇村河陰
竣工年月　平成25年6月
用　途　温泉旅館
構　造　木造＋鉄筋コンクリート造
階　数　２階
敷地面積　8,663.30m2
建築面積　633.98m2
延べ面積　796.59m2

第20回くまもとアートポリス推進賞募集要項

趣旨

熊本県は、環境デザインに対する関心を高め、都市文化並びに建築文化の向上を図るとともに、文化の情報発信地としての熊本を目指して、優秀な建築家やデザイナーの才能・アイデアを結集し、機能面はもとよりデザイン面にも優れた、後世に残る文化的資産を創造するため、「くまもとアートポリス」を推進しています。

また、県内各地の優れた建造物等について顕彰し、建築文化に対する関心を高めるため、平成７年から「くまもとアートポリス推進賞」の表彰を行っています。

表彰対象

概ね５年以内に竣工（改造、改修、修復を含む。）した熊本県内の建築物、橋、公園、記念碑等の建造物及びそれらで構成された一群の施設等（くまもとアートポリス参加プロジェクト及び県の施設を除く。）とします。

選考基準

本賞の選考は、建造物等の企画、設計、施工及び施設の利用について、次に示す評価のポイントをもとに総合的に評価します。

評価のポイント

① ②～⑥の評価ポイントがデザインに反映され、優れているもの
② 新しい技術的提案や工法の改善が行われているもの
③ ひとや環境に優れた配慮がなされているもの
④ 施設の活用に創意工夫がみられるもの
⑤ 地域づくりに寄与しているもの
⑥ 長いスパンのライフサイクルに配慮されているもの
⑦ 良好な施工が行われているもの
⑧ 維持・管理が良好なもの

賞

「くまもとアートポリス推進賞」、「くまもとアートポリス推進賞選賞」とします。
事業主（必要に応じて管理者を含む。）、設計者及び施工者に知事が表彰状を贈ります。

応募資格

自薦、他薦を問わず、どなたでも応募できます。

選考委員（50音順）

青木　淳（青木淳建築計画事務所代表）
大野 郁子（イラストレーター、ＪＡＧＤＡ会員）
北野　隆（熊本大学名誉教授）
高橋 晶子（ワークステーション共同主宰、武蔵野美術大学教授）
田野弘一郎（熊本日日新聞社編集局文化生活部長兼論説委員）
塚本 由晴（アトリエ・ワン共同主宰、東京工業大学大学院准教授）
西嶋 公一（オフィス・ムジカ代表、熊本県文化協会常務理事）

選考経過

募　　集　平成26年 6月24日(火)～ 8月25日(月) 応募件数46件
書類選考　　9月30日(火)
現地審査　　10月27日(月)～10月28日(火) 現地審査件数:8件
最終選考　　10月28日(火)　　推進賞５件、推進賞選賞3件
表 彰 式　平成27年 2月11日(水)